

昨年の卒業制作展を柿落しとして活動を開始し、映像作品展をはじめ様々な展示を展開してきた「学芸ラボ」の一年を振り返り、その活動の紹介と効果、課題を考察した。

## 04

## 学芸ラボの活動報告と今後の課題

## Report and Considerations on Gakugei Laboratory

映像メディア学科・特任教授

Department of Visual Media・Professor

瀬島 久美子 Kumiko SEJIMA



毎日新聞 2011年8月22日朝刊

## 1 学芸ラボの概要

## 1.1 学芸ラボ開設の経緯

学芸ラボが開設された名古屋市中区栄の万勝S館は第1回あいちトリエンナーレ2010開催時にインフォメーションセンターとなっていたビルであり、2013年開催予定の第2回あいちトリエンナーレを前に、万勝S館の地下、2階、3階を使って愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学による「大学連携プロジェクト」が計画されていた。

愛知県国際芸術祭推進室からの申し出により、大学連携プロジェクトに加えて、名古屋学芸大学も万勝S館にギャラリーを開設してはどうかとの打診を受け、学内で検討が進められ、法人、大学の各局長、学部長、副学部長、映像メディア学科諸先生がたのご尽力により、万勝S館の4階を期間限定で借り受け、「学芸ラボ」の名称でラボラトリーを開設することとなった。

第1回あいちトリエンナーレ2010は、伏見界限を活性化の重点地区として開催され、愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学は、それぞれ栄、伏見界限にギャラリーを開設してトリエンナーレに参加していたが、名古屋学芸大学はギャラリーを開設することもなく、大学としてトリエンナーレに参画することなかったため、卒業生、在校生からギャラリー開設とトリエンナーレへの参加が切望されていた。

アートラボあいち1階はあいちトリエンナーレ情報スペース、地下1階、2階、3階は大学連携プロジェクト企画展会場、4階は「学芸ラボ」として2011年8月21日オープニングセレモニーが行われた。

あいにくの雨のなか多くの来賓を迎え、東海圏のテレビ、新聞などに報道され、アートラボあいちと学芸ラボがオープンした。

学芸ラボでは、当時助手の平川裕樹(第一期卒業生)キュレーションによる映像作品展「Frame per Second」(アニメーション6作品)が開催された。

frame per Second 上映作品

「バリカン」2009年 幸洋子 サウンド松下直人

「ガラス男の恋」2010年 江口詩帆

「窓辺」2010年 河瀬直和

「ハトになるまで」2011年 村本咲

「微熱」2010年 南條沙歩

「君のみる夢は」2011年 小島志穂子



frame per Second 上映風景 2011 8/21sun - 23 tue

学芸ラボの内装については、デザイン学科平光無門先生の設計協力により、オープニングセレモニーの後、内壁とパーテーションの一部施工工事が行われた。

一般的に、ギャラリーでは絵画の展示や作品の支持体として利用するいわば消耗材としての内壁が必要とされるが、期間限定の学芸ラボでは必要最小限の壁面を設置し、2011年1月の卒業制作展を学芸ラボの実質的な柿落しとして活動がスタート。以降、ゼミによる実験展、卒業生による企画展、学生グループの展覧会などが開催された。

## 1.2 ラボの目的と意味

アートラボあいち、学芸ラボ、それぞれにlaboratoryという名称になっているが、それはアートラボあいち全体を若手作家の育成、発掘のための場とすること、そして学芸ラボは学生の展示体験、制作実験の場とするという目的ゆえである。且つ学芸ラボはあいちトリエンナーレ2013を視野に入れ、学生育成ばかりでなく、大学の情報発信拠点として活用することも視野に入れている。

日本のアート業界に存在するギャラリーには大きく分けて二種類あり、ひとつは貸しギャラリー（または画廊）といわれるもので、およそ一週間単位でギャラリー空間が貸し出される。もうひとつは企画画廊といわれるもので、ギャラリーのキュレータの選んだ作家による個展やキュレータによる企画を中心として運営される。日本の画廊はこの2つの混合タイプが多い。

2002年にカナダ大使館から東京の主なギャラリーとそのシステムについてのレポートを依頼されたことがある。ギャラリー空間を貸し出す賃貸方式がほぼ存在しない欧米の作家にとって、日本特有のシステムによる画廊業界が理解しづらいという理由による要請であった。

地価の高い日本での高額賃貸料はギャラリーの場合でも同様で、名古屋で一週間10万円〜20万円、東京の銀座、青山ともなればその相場は優に20万円を超える。

社会に出てクリエイターとして活動するために情報発信したい学生にとって、賃貸システムは作品発表の機会を簡単に得られるという意味でありがたい存在といえるが、制作に先立ってギャラリーの賃貸料を稼ぐことから始まるという点で、欧米作家とは出発点から差があるといえる。

こうした事情から鑑みて、アートラボあいちのように公共機関が若手作家のための場を提供することや、学芸ラボのような学生が無料で作品制作実験や試作、研究発表の機会を持てる場があることは、学生の育成に大きな意味を持つ。

ギャラリーでの作品発表は空間と作品の関係性についてセンスアップでき、来場者たちとのコミュニケーションによって評価を得るという経験も積むことができる。また、ギャラリーは鑑賞者が訪れやすい場所にあるかどうかというロケーションも重要な条件である。

学芸ラボの場合、一般事業向けのビルを転用しているため消防法の適用が厳しいという難点はあるものの、県が借り受けたビルの一部を転貸借することで、賃貸料は伏見界限標準の約半額。しかもギャラリーの密度が高い伏見にあるため、画廊廻りをする人々が必ず立ち寄るという大きな利点があり、アートラボあいちのビルは県が運営しているため知名度も高い。

## 2 学芸ラボにおける展覧会記録

学芸ラボで開催された展覧会は大きく4つに分けられる。

- (1) ゼミ、学科を主体とした展覧会
- (2) 学生、教員、卒業生有志による自主企画
- (3) 複数学科、他大学、学会などとのジョイント企画
- (4) 常設展

以下に開催された展覧会の一部を紹介する。

### (1) ゼミ、学科を主体とした展覧会

『2011ゼミ展優秀作品上映』

2011年ゼミ展秀作映像3作品をsingle showing。

『CG作品特集』

2011年CGゼミ秀作7作品をsingle showing。

『堀川の新しいカタチ』

デザイン学科3年立体空間コース

街の景観形成や活性化に重要なポジションを占める川。立体空間コースでは、毎年、名古屋市を流れる堀川運河沿いの地域活性化のための景観形成や活性化についての研究を提案している。学芸ラボではゼミ生の提案が模型やパネルによって展示された。





立体空間コース堀川再開発計画案「堀川の新しいカタチ」

### 『空間制作実験展』

インスタレーションゼミ3、4年生による作品制作実験。ラボ＝実験場であることを生かし、完成された作品を発表するのではなく、制作のための実験をすることで、空間を体感し、作品完成への足がかりとした。出品学生のコメントより

「実験展であるから、あらゆる手法を試したい。使い古された技法の中に、見る人を驚かせられるような新しい可能性を見つけられたらと思う」。奥村史門

### 『インスタレーションゼミ制作展』

インスタレーションゼミ3、4年生による作品発表。実験展で体得したものを基にコンセプトに沿った作品を展示。



インスタレーションゼミ制作展より

## (2) 学生、卒業生、助手、教員有志による自主企画

### 『nest「家」』

デザイン学科4、5期生、教員、学部生による立体平面作品発表。

### 『the weekend artists』

映像メディア学科2期卒業生有志による展覧会。

高津健太(平面・映像)、高橋一實(写真)、平岩毅雄(写真・インスタレーション)、トダカオリ(映像・インスタレーション)4名による作品展示。



My Design「家」

### 『映像表現特論制作展「Papers」「道」』

大学院生による写真作品。大学院での研究成果を発表。

### 『ジョシュテン！』

映像メディア学科助手による作品展。学生にとって、様々な場面でフォローしてもらい機会が多く、身近な存在の助手による展覧会は学生が参考になりたいと考えるようで、多数の在校生が来場した。

### 『横山達也写真展』

助手横山達也による学芸大学卒業後初個展。在籍中からのテーマである「肖像写真における人間とは何か？」をさらに展開した写真展。

### 『7展』

通常ゼミ作品は一人一作品で評価されるのであるが、『7展』ではインスタレーションゼミ生7名でひとつの空間作品を制作するという初めての試みに挑戦。

## (3) 他大学、学会などとのジョイント企画

### 『Video Party』

デザイン学科の教員、学生による空間制作＋映像メディア学科、大阪成蹊大学情報デザイン学科の映像作品上映。

伸縮性に富んだ布を使った触覚を喚起する造形空間にモニターを配置し、視覚と触覚の遠近法が重ねあわせられたインスタレーション空間。



Video Party



#### (4) 常設展

『大学紹介パネル展(映像メディア学科)』

大学の紹介用に制作されたパネル、大学案内の展示。



大学紹介パネル展示



大学案内展示コーナー

### 3 ラボラトリー効果

#### 3.1 まちへの効果

ラボラトリーとは、そもそも試験所、実験所、製造所のことであり、完成された作品を市場に送り出して評価を得るのとは違って、若手作家の斬新な試みの実験場である。

近年、アートラボ・トーキョー、アートラボ・アキバなど、若手作家の活動をフォローする場としてのラボが開設されており、ギャラリスト、キュレータもいわゆる学芸員資格取得者ではなく、資質を持つ人材がインディペンデント・キュレータとしてその役割を果たすことが増えている。

こうした傾向は欧米では、公的機関や企業が都市の再開発と絡めて作家を支援し、その創造力を活用するシステムとして、すでに確立されたっており、トロントのクィーンズストリート、キングズストリート、ウォーターフロントの再開発地区には老舗ギャラリーからインディペンデントのラボまでを含めて、数百件のギャラリーが街の活性化、景観形成、美化に貢献している。



カナダ トロントの工場跡地を再利用したアートセンター 401 Richmond

秋葉原の廃校を利用した3331 Arts Chiyoda には、多摩美術大学のギャラリー「アキバタマビ21」が入居、武蔵野美術大学は東神田にギャラリー「α M」を持ち、都市の文化軸として活動している。

あいちトリエンナーレ2010も長者町の活性化も視野に入れて開催され、アーティストが生活者と共にプロジェクトを推進することで、まちに創造へのエネルギーを吹き込み、活気が生まれ、実行委員会、長者町関係者とアーティスト、デザイナーの協働による効果で空き店舗が減少し、地価は上昇に転じている。

愛知県のプロジェクトである「あいちトリエンナーレ2013」には、学芸大も学芸ラボを核として都市とアートの連携プロジェクトに参加できればと考えている。



台東区練成中学校跡地を再利用した3331 Arts Chiyoda



3331 ARTS CYD に入居する多摩美術大学ギャラリー[アキバタマビ21]内部



### 3.2 学生への効果

#### インスタレーションゼミの場合

展覧会記録で報告したように、学芸ラボではさまざまな展覧会が実施されたが、学生に体験の場を提供するという目的について、インスタレーションゼミ(担当:稲垣、小笠原、斎藤、瀬島)では、3年生の「ゼミ展」、4年生の「卒業制作展」を目標に、第一段階として「実験展」、次に「制作展」を計画した。

実験展はタイトルの通り、完成された作品を展示するのではなく、構想しているものを実体空間で具現化してみる実験である。



空間制作実験展 奥村史門

机上の構想段階では独自性のある発想が自由に飛び交い、作品の可能性が学生の眼前に広がっているのだが、実体空間には様々な現実が立ちはだかる。重力、質量、材質に支配されるのはもちろんのこと、それらを使いこなす技術、作品設置のための支持体確保、電気関係の処理、空間の光のコントロール、作品搬入路の確保、補助人員の確保、等々。作品を制作し、公開するにあたって想定される様々な条件は、実体験を積むことなしには会得されない。

学生達は、実験展でさまざまな問題に遭遇することによって、実体空間に作品をどう配置し、表現の完成度を上げるべきかについて考えることができるようになる。

次の段階の制作展では、作品がシェイプアップされ、ようやく鑑賞者の客観的なまなざしを想定できるようになる。ゼミ展、卒業制作展に至るまでに2回の経験では充分とはいえないが、学生にとって空間、時間、物質との格闘の経験は大きな収穫になる。

また、インスタレーションゼミでは、展覧会案内を新聞各社に送ることも経験の一つとし、学生自身にアタッシュ・ドゥ・プレスを任せた結果「インスタレーションゼミ制作展」の記事が新聞の社会面に掲載されたことも励みとなった。

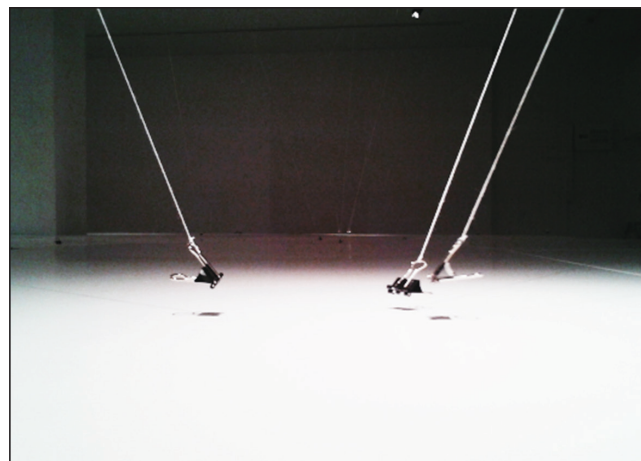
そして、4年生の卒業制作展を目指した展覧会では、卒展の準備としての作品制作を目指すはずであったが、ここで教員によって想定外の展覧会が学生達によって計画された。インスタレーションゼミ4年生7名全員で一つの作品空間をつくるという企画である。

一年間に2回の発表を経験した上で、より大きな空間作品に挑戦しようとするこの企画は、学生にとってはより高いハードルを超えようとするものであった。

大きな空間を相手に材料の強度の見極め、パーツの準備、設置の手順、設置にかかる時間の読みなどをどう進めていくか進捗状況を見守っていたが、まとめ役の学生をはじめ、さまざまな役割を担う学生が四苦八苦の様相を呈し、オープン当日の朝まで制作を続行していたという惨状ながらもなんとか完成にこぎつけた。



「7展」会場風景



「7展」細部

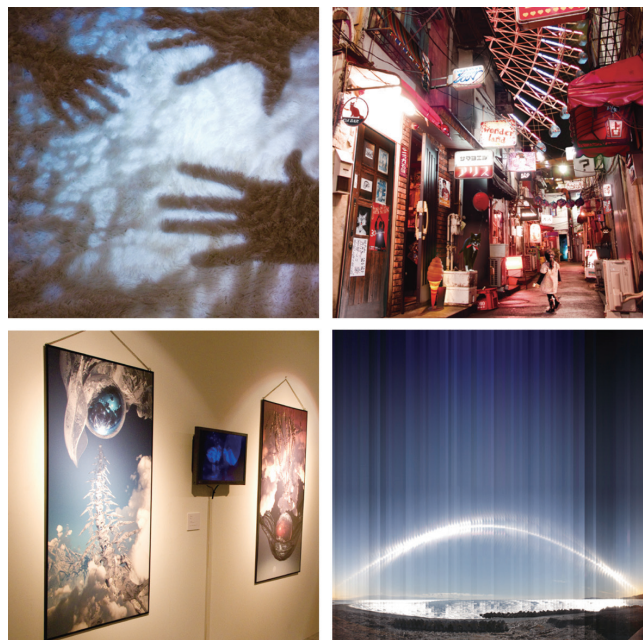
こうした実験的試みと経験は、一人に割り当てられる空間や設置時間に制限がある展覧会では不可能であり、また、釘や画鋸の使用を禁止されているギャラリーでも不可能である。

### 3.3 情報の相乗効果

卒業生による『The Weekend Artists.』

トダカオリ助手のキュレーションによる映像メディア学科2期卒業生有志5名の展覧会であるが、The Weekend Artists. のタイトル通り、すでに就職した卒業生が仕事の合間に制作した作品の展覧会である。仕事をしながらの制作とはいえ、彼らの成長ぶりには目を見張るものがあり、作品に垣間見える社会人としてのキャリア、技術向上、絶えることのない制作意欲が作品に反映された質の高い展覧会であった。

また、この展覧会中に平岩毅雄作品がキャノン主催写真新世紀で佳作に選ばれるという朗報も伴って集客力も高く、多くの在校生が訪れたばかりでなく、卒業生が集まる機会となり、企業の間にも学芸大学の名前が印象づけられる機会ともなった。



The Weekend Artists 出展作品

## 4 ラボラトリーの展開について

### 4.1 設備

ギャラリーの設備については、作品展示用の内壁。支持体としても利用できるダクトレールや壁面、床面各所にコンセントの配置。それに伴う電力の確保。加えてギャラリー入口とは別に“くつづり”のない大きな搬入口。そして備品を収納する倉庫、来館者対応スペース。上映装置、照明器具などの備品、消耗品が必要とされる。

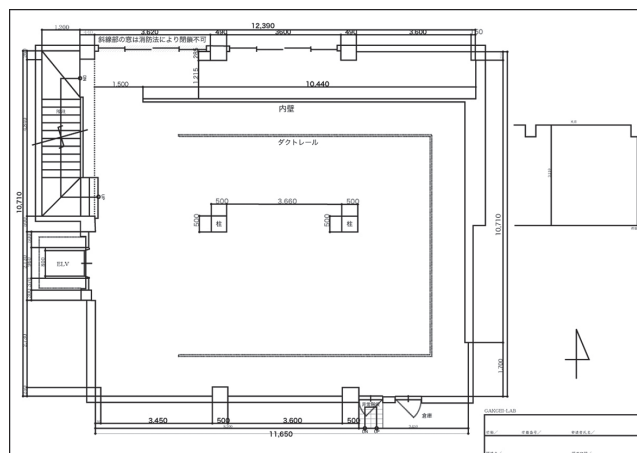
学芸ラボは、これらすべてを完備しているわけではないが、むしろ建物優位の使用規定に縛られることなく、作品制作から展示に至るプロセスにおいて実験を繰り返し、スキルを身につけられる場があることの方が学生にとっては重要な条件と考えられる。

### 4.2 空間

学芸ラボの使用可能な空間はおおよそ7m×7mである。作品展示を経験した人たちにその使い勝手について意見を聞いてみると、小さな立体物やパネル中心の展示には広すぎる、パネル展示には内壁不足ということであった。

これには可動壁を備えるということで対処できるが、“多様なメディア、大きさ、タイプに対応する使い勝手の良い展示空間とは

どのようなものか？ホワイトキューブがスタンダードで良いのか？”についてはMOMAオープン以来論議され続けているテーマであり、ある意味でアート、デザインの変遷とともに研究、工夫され続けなければならない課題でもある。



学芸ラボ図面

### 4.3 ラボの運営について

通常ギャラリーの運営については、アーティストを発掘し、また持ち込まれた企画を検討し、スケジューリングし、情報発信していくキュレータが必要とされるが、学生を主体として実験的展示を経験させること、大学の情報を発信することが大きな目的である学芸ラボの場合は、キュレーションよりは常設展示や会場管理ができる人材が必要となる。

2012年度に入ってから、3年生を対象にアルバイトを募り、週1回のペースでスケジュール管理、常設展示の展示替え、備品の管理、会場補修の方法などをひとつひとつ指導しながら経験させてみた結果、ギャラリーではどういう仕事が必要であるかを全く知らない学生も、数ヶ月すると徐々に指示待ちではなく、自らやるべき仕事を考えることが出来るようになってきている。

学生を制作現場に送り出す為には、表現者としてラボで作品発表するだけではなく、企画推進、プロジェクト管理など、制作者、ディレクター、プロデューサーとしての体験も必要である。

学芸ラボを育成と情報発信の場として活用しつつ、「あいちトリエンナーレ」に参加して、学生が社会との関わりを経験できるように、教員、助手の方々と来年度の企画を検討中である。